



日本語検定への取り組み

校長 フランクフルト 補習授業校
渡邊千雪先生

二〇一六年度・二〇一七年度と連続して「日本語検定委員会特別賞」をいただき心より御礼申し上げます。当初は暗中模索状態であったこの受検への取り組みが、このような形で評価されることが何よりも嬉しいことです。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

フランクフルト補習授業校では二〇一〇年度より授業の一環として「日本語検定受検」を導入いたしました。本校では、母国語としての日本語教育を行っており、文科省の検定教科書を使用し、授業を行っております。その方針をより確かなものにし、また、児童生徒が正しい日本語を習得できているかを確かめる機会として、日本語母語者を対象としたこの日本語検定を受検しています。

一年目は中学生のみを対象に団体受検を行いました。翌年には小学部六年生の児童にまで対象を広げました。これは、中学三年生までの在学期間中に全員がより段階的に受検出来るようにという配慮からです。また、今年度（二〇一八年度）からは卒業生にまで門戸を広げ、日本語を継続して学び続けていける体制作りにも着手いたしました。

前述いたしました「授業の一環」というのは、六年生以上の児童生徒全員が必ずいずれかの級を受検することを義務付けているということです。受検に際し目的として掲げていることは、「自分自身の日本語能力の優れている所・または足りないところを知り、さらなる進歩の目標を持つこと」です。ですから、単に何級に合格したということが重要なのではなく、仮に不合格だったとしても、「この領域では素晴らしい実力を備えていること」などの長所を褒め、伸ばしていけるような指導を心がけています。

ドイツに暮らしていて、ドイツ人の方と「日本語」の話題になると誰しもが漢字の複雑さに言及します。「小学校六年間で一〇〇六文字を習う。」と説明すると、誰しもが驚き、「勤勉な日本人にしかできないね。」と言われたこともあります。確かに、

補習校に通う児童生徒にとって、漢字学習は日々の戦いそのもので、小さな積み重ねなしでは身につかないものです。しかし、小さい時から、順番に覚え、読み書きをしている内に、ひとつひとつの漢字の持つ意味も何となく理解できるようになっていくのですから不思議です。このことを強く感じた出来事をお話しします。それは、ここフランクフルトで年に一度開催される「日本コネクション」という映画祭での出来事です。この映画祭の詳細については割愛いたしますが、約一週間の間に百本以上の邦画が、市内の各地で一斉に上映されます。

その日、「シンゴジラ」の上映がありました。ドイツ人の観客が八割ほどで満席でした。上映に先立ち、以下のような挨拶がありました。

「この映画のタイトルはすべてカタカナです。さて、この「シン」の部分漢字にすると、どうなるでしょうか。新でしょうか。真でしょうか。神でしょうか。そんなことを考えながらご覧ください。」と。

確かに全部「シン」と読みますが、どの漢字を使うかによってニュアンスがかなり違います。大変に面白い挨拶だと感心したと同時に、この微妙な差を感じることができたドイツ人の観客はどのくらいいるのだろうかと思いました。また、帰宅して私なりの「シン」「ジラ」を考えてみました。「進」「親」「震」「シラ」……まだまだ出来そうです。このニュアンスを感じることが出来るくらい日本語力を、本校の児童生徒にもつけてほしいという思いになりました。

今年度も十一月の受検に向けて、児童生徒は一生懸命頑張っています。